



図書館だより



2025 年
6 月 27 日発行

秋草学園高等学校 図書館

2025 年も半分過ぎました。6 月 30 日は夏越の祓（なごしのはらえ）といい、一年の折り返しとして茅の輪くぐり（ちのわくぐり）という風習があります。神社の行事ですが、インバウンドの方々にも人気があり、回る方向が逆かもしれないぞオーマイガー！といったつづ何回も輪くぐりをする様子は、見ていだけでも楽しく感じます。

さて、図書館の一年の折り返しはどのようになっているのでしょうか。図書館の中で迷っていた生徒が、目指すところにスゥッと行けるようになりました。バスの時間調整に図書館を覗くことが習慣になりました。おしゃれや芸能界などサブカルチャーの雑誌もあるんだと気がつきました。図書館はいろいろできるところなのです。

大阪・関西万博に行こう！行ったつもり！！

4 月に開幕した「大阪・関西万博（国際博覧会）」は 10 月 13 日まで開催されています。図書館では、案内本を用意しました。また、1970 年の大阪万博に関する本も特集しました。55 年の時を経て、人が、街が、時代がどのように変わったかを見てみましょう。

2025 年

606-7 『大阪・関西万博ぴあ』
真島文吉 著 ぴあ

606-ル 『るるぶ大阪・関西万博へ行こう!』
JTB パブリッシング

606-タ 『万博をとことん楽しむ本』 宝島社

各社が旅行本を出版しています。どの本も、パビリオンの見どころ一覧、マップ、イベントカレンダーなどをガイドしています。もちろん、グルメのコーナーも充実しています。さらに、万博会場以外にも、大阪・関西に着目し、旅行案内もしてくれています。

1970 年

606-7 『大阪万博 20 世紀が夢見た 21 世紀』。平野暁臣 編著 小学館クリエイティブ

1970 年の大阪万博を振り返りつつ、その後の日本の数々の万博と発展を取材しており、万博についての報告書のような構成になっています。万博の意義を問うという姿勢です。しかし、そんな学術的な文章はさておき、膨大な写真枚数により 1970 年大阪万博の歴史を見るには十分な質と量です。2025 年の万博と比較するもよし、1970 年に想像していた 21 世紀と現在を比較するもよし、読み方は自由です。

1970 年、または、大阪を描いた本

B913.6-3-1、-2 『国宝』
吉田修一 著 朝日新聞出版

この小説は、映画「国宝」の原作です。主人公「立花喜久雄」が歌舞伎スタアになったのが 1970 年代。それから 50 年以上歌舞伎の世界で生きています。『国宝』というタイトルと関係あるのでしょうか。また、主人公が長崎弁からゆるやかに大阪弁で話すようになる変遷も面白いものです。岡野玲子のカバー装画も秀麗です。

B913.6-マ 『告白』
町田康 著 中央公論新社

明治時代、大阪府で起きた大量殺人事件「河内十人斬り」を題材にした小説です。河内は大阪府ということでの欄で紹介しているので万博とは何ら関係ありません。残酷な事件なのですが、当時は大いに話題にされたようで、「河内音頭」にもなっているそうです。

そして、何よりも、全編大阪弁（たぶん河内弁）なので、大阪を感じられるのではないのでしょうか。

新着コーナーの気になる本

S780-モ 『スポーツを支える仕事』
元永知宏 著 岩波書店

スポーツ選手は人気職業ですが、それを支える人々がいてこそその花形選手なのです。いわゆる縁の下の力持ちには、夢を持って就いた人、選手の道をあきらめて就いた人それぞれです。

本書は、前向きにいろいろな経験をして、現在はスポーツを支える仕事についている 8 名の事例をわかりやすく伝えています。将来スポーツに関わる仕事をしたいと希望する人は必読です。

司書の今月はこの本読みました

あまり本を読まない司書ですが、ベストセラーは結構読んでいます。といってもかなり昔です。図書館でみかけて「なつかしい」気持ちで手に取りました。『キッチン』（吉本ばなな/新潮社/B913.6-3）は吉本ばななのデビュー作です。当時は「吉本隆明は娘に-ばなな-と名付けたのか？そんなばなな！」（ご本名ではありません）と本の内容以上にセンセーショナルでした。もちろん、本の内容は文句なく、身内を次々亡くした女性が、それを乗り越える過程が描かれています。ジェンダー時代にふさわしくないいい方ですが「女の子の気持ちは女の子にしかわからないよね」という気分になったものです。ちょっと時間が空いたときに読むのにちょうどいい長さなのでおすすめです。

それにしても、本を読まない司書なので、「吉本ばなな」が「よしもとばなな」になり、いつのまにか「吉本ばなな」に戻っていたことも知りませんでした。

【横関】

